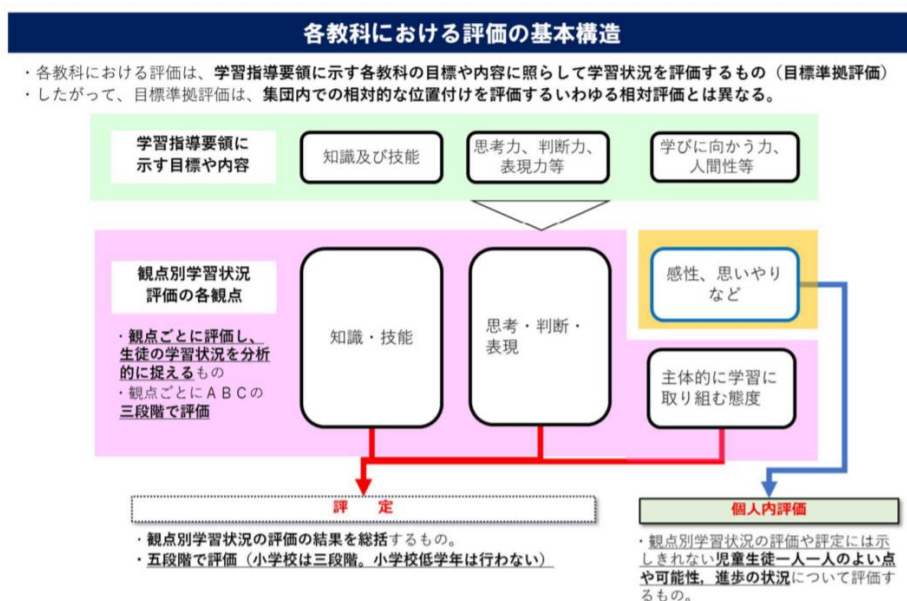


新学習指導要領（高等学校）導入に向けての評価ガイドライン

高校新課程とその評価

高等学校では、2022年度より新指導要領が全面実施となります。改訂の大きなポイントとして、学習指導要領の目標及び内容が資質・能力の三つの柱として整理されました。対応する形で、評価についても変更がなされ、各教科・科目で行われていた「観点別学習状況の評価」の観点が「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」の3つに整理されています。



文部科学省中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会、「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」（平成31年1月21日）

https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2019/04/17/1415602_1_1_1.pdf（参照 2022-02-21）

- 1) 「知識・技能」は従前の「知識・理解」「技能」に対応しています。知識の習得を問うだけでなく、概念の理解を問う問題を織り交ぜることが重要とされています。また、各教科に合わせて知識・技能を用いる場面を実際に設ける工夫も考えられます。
- 2) 「思考・判断・表現」は従前の「思考・判断・表現」に対応しています。評価のためには筆記試験だけではなくレポートの作成、話し合いやプレゼンテーション、作品の制作など教科に合わせた多様な活動を用意することが大切です。
- 3) 「主体的に学習に取り組む態度」は従前の「関心・意欲・態度」と同じ趣旨ですが、「各教科の学習内容に関心を持つこと」だけでなく、粘り強く取り組む姿勢や自分自身の学習を調整するような、「よりよく学ぼうとする意欲」という側面がより強調されています。そのためにはノートや授業中の発言といった個性に差がある部分だけでなく、教師による日常的な行動観察や生徒の自己評価等を含めて評定とすること必要となります。

「指導と評価の一体化」という視点からも、教育内容が多様になればそれだけ評価の観点や方法も多様化することが望まれます。

新学習指導要領（高等学校）導入に向けての評価ガイドライン

変わる大学入試

大学入試も大きく変化しています。まず選抜方法が多様化しています。一般入試（選抜）のほかに、学校推薦型選抜や総合型選抜（旧 AO 入試）という選抜方法があり、その募集定員の割合は国公立・私立ともに高まってきています。大学独自の選抜方法も用意しているケースも多く、各大学は多様な資質を持つ学生を求めているようになっていくことがわかります。

例えば、京都大学の特色入試では学部ごとに求める人物像を募集要項にて次のように示しています。そのうちの教育学部の部分を抜粋します。

- ・教科の学習及び総合的な学習の時間などにおいて学習を深め、テーマを設定して探究活動を行い、卓越した学力を身につけ、成果をあげた者、あるいは、学校内外の活動で豊かな経験を積み、創造的な熟達を通して、深い洞察を得ている者
- ・人間と社会、教育や心理について関心を持ち、論理的・批判的に思考し、問題を解決する能力とコミュニケーション能力を持つ者
- ・将来、教育や心理にかかわる専門的識見を発揮して、社会に貢献する志を持つ者

京都大学、「令和4年度京都大学特色入試選抜要項」

https://www.kyoto-u.ac.jp/sites/default/files/inline-files/R4_tokushoku-454849b43bf66e12327df72f272326ce.pdf, (参照 2022-02-21)

入試問題も知識だけでなく多様な力を問う出題がされています。特徴的な例を2つ示します。

対立や不一致、あるいは矛盾する複数の原理がぶつかりあうような事例をあなた自身が設定し、その当事者として判断や決断を下し結論を出すとしたら、どのような可能性が考えられるかについて論じなさい。

京都大学、「令和2年度試験問題」教育学部 課題

https://www.kyoto-u.ac.jp/sites/default/files/embed/jaadmissionstokusyokupast_eqr2_eqdocumentsr02_educ.pdf, (参照 2022-02-21)

以下は、教育に関する各種指標について順位と数値を示したものです（中略）。これからあなたが選んだ都道府県（1つでも複数でも構いません）について、考えられる課題とそれを踏まえた今後の展望や解決策について1,001字以上1,200字以内で述べてください。

早稲田大学、「令和3年試験問題」新思考入試（地域連携型）の問題一部抜粋

https://www.waseda.jp/inst/admission/assets/uploads/2022/01/99_2022_shinshikou_sougou.pdf, (参照 2022-02-21)

筑波大学、「令和2年度入学試験問題」推薦入試 情報学群情報科学類

普段の授業などで考え方の練習をしていないとその場で急に答えを出すのは難しいでしょう。各教科と関連した話題で主体的・対話的な学習を行い、その評価をしながら訓練を積んでいくことが必要になります。

新学習指導要領（高等学校）導入に向けての評価ガイドライン

「思考・判断・表現」の観点の評価

各教科の特質に応じて、見方・考え方を働かせ、知識・技能を活用する中で考えたり判断したり表現したりする学びの過程で育成される力が「思考力、判断力、表現力等」であり、それを見取るための評価の観点が「思考・判断・表現」となります。ポイントは2点あります。

- ①生徒にとって簡単に答えの出ない問い・課題をもとにした「主体的・対話的で深い学び」を行うこと
- ②ある一時点での評価を行うだけではなく、学びの過程を評価すること

ここでは評価ということで②のポイントを実現するための評価規準・基準の作成について紹介し、のちに例を示します。生徒の力を伸ばす日々の評価（形成的評価）と、評定のための評価（総括的評価）と両面が必要となります。

1) 評価規準：質的なもの、方向目標のイメージ

形成的評価の評価規準は、単元目標をもとに単元ごとに作っていくこととなります。学習の過程を評価するためには授業中の話し合いの様子や論述・発表内容を見ていく必要があります。活動内容も意識しながら設定ができるとよいでしょう。

総括的評価の評価規準は、単元内容のみならず、教科横断的に入試問題も意識しながら情報の収集力や論理・意見の構築力なども考慮して設定するのが望ましいです。

2) 評価基準：量的なもの、到達目標のイメージ

評価基準は、ルーブリックを用いて行うのがよいです。ルーブリックとは評価基準表のことで、評価項目ごとにS・A・B・C（レベル数は任意）と到達レベルを用意し、到達レベルを文章でまとめたものです。評価項目は評価規準をもとに、授業レベルに具体化できるとよいでしょう。

例：高校国語 単元：表現/レポートの作成

「思考・判断・表現」の評価規準（上記の1）に対応）

- ①情報の妥当性や信頼性を考えたうえで適切な情報を収集し、伝えるべきことを明確にまとめている。
- ②わかりやすい文章となるよう、論の順序や展開に工夫をしている。

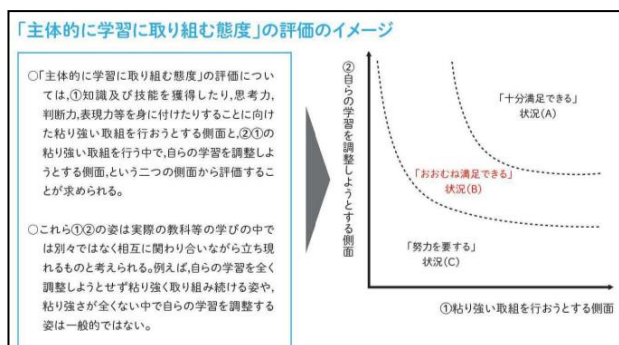
ルーブリック（上記の2）に対応）

項目/レベル	S	A	B	C
レポートの論点と論拠	論点の明確さ・情報収集ともに模範となる	論点明確かつ適切な情報を選べている	論点は明確だが情報収集に改善の余地あり	論点不明瞭かつ適切な情報を選べていない
レポートのわかりやすさ	文の展開に工夫があり、模範となる	文の展開に工夫がみられ、わかりやすい	文の展開がスムーズである	文の展開に工夫が見られず、わかりにくい

新学習指導要領（高等学校）導入に向けての評価ガイドライン

「主体的に学習に取り組む態度」の観点の評価

「主体的に学習に取り組む態度」とは、「粘り強い取組を行おうとする」とこと、「自らの学習を調整しようとする」とことです。ただ、抽象度も高く、どのように評価をしているのかが「思考・判断・表現」以上に難しいです。態度の表出は筆記試験では測れないですし、個人差・レベル差・場面の違いも関わってきますので、授業中の教師の感覚のみでは妥当な評価とはなりづらいというのも非常に難しいポイントです。また、1人の先生のみで生徒のパフォーマンスを評価しきるのも、今の学校の現状では現実的ではありません。



文部科学省国立教育政策研究所教育課程研究センター

「学習評価の在り方ハンドブック（高等学校編）」

（令和元年6月）

[https://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/](https://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/gakushuhyouka_R010613-02.pdf)

[gakushuhyouka_R010613-02.pdf](https://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/gakushuhyouka_R010613-02.pdf)

（参照 2022-02-21）

そこで、主体的な学びを形成する生徒のスキルに注目するのがよいでしょう。大きく以下の2つに分けられます。

- 1) 非認知能力：はっきりした定義はありませんが、ここでは、探究学習やプロジェクト型学習に必要なコミュニケーション能力や問題解決能力、自己肯定感などを指します。
- 2) 振り返り力：自らの学習の調整に必要な、これまでの取り組みをもとに、次の実践で考え方や行動を改善しようとする力です。

この2つによって、簡単には解決できないような場面において適切な方法を選びながら粘り強く取り組むことができるようになり、振り返りを通じて自らの学習の調整も可能になります。これらのスキルの評価方法は「思考・判断・表現」と同様、単元ごとに活動内容も想定しながら評価規準を設定し、ルーブリックの評価基準を作成することによって、感覚だけでない評価が可能となります。

非認知能力の場合、先生の評価だけでなく自己評価も導入できるとなおります。自分の学習の調整には自己理解がとても大切になります。今の自分の力についてどう捉えているか、例えば自信過剰気味だと次への改善が行われにくくなる傾向があります。振り返り力については、学校行事や単元のまとまりごとに振り返りシートを記入させ、目標設定を行うとよいです。はじめは「もっと計画的にする」など抽象的で行動に移しにくい目標設定が多いですが、徐々に「1週間前に必要な時間を見通し、日付ごとに配分する」などと具体的な目標設定になっていきます。この過程を評価できるのが理想的ですので、振り返りシートは蓄積できるよう、ポートフォリオとしてまとめていきましょう。